

竹から高付加価値製品「タケックス・ラボ」

「抗菌」「環境」未知の用途探る

飛翔!
丸の内発VB

竹を原料に、抗菌剤や食品添加物など高付加価値製品を順次開発しているのが、タケックス・ラボ。清岡久幸社長は、高知県の竹工房で生まれ、竹職人として土産物などを作る会社を経営していた父のもと、竹の中で育ち、現在の会社を立ち上げた。

職人の一言が契機

清岡社長は高校時代に、大病を患って小児科病棟に入院した。そのとき、子供の看護で付き添っていた母親たちから「もっと食生活に配慮しておけば良かった」という後悔の言葉を相次いで聞かされた。

自身は約2年半の入院生活を強いられたが、その過程で食の安全に対する思いが大きくなり、退院後のある日、工房で働く職人が発した「しまった」の一言が人生の転機となった。

その職人は、竹の皮をはいだまま食事に行ってしまった。竹

竹を原料に除菌効果のある商品を手にする清岡社長

の表皮には、カビの発生を防ぐ機能があり、皮をむいた竹は数時間でカビが生えてしまう。職人は、それを体験的に知っていたわけだ。「食品添加物の代わりに竹を活用できれば、病院で見たような辛い場面に立ち会わなくて済むのでは」と。「しまった」の一言は「竹ビジネス」の将来性を示唆してくれたわけだ。

ただ、高校時代のほとんどが入院生活だったので、化学の知識はなく、抽出方法などは全く分からなかった。だが、独学で課題を解決していく。

一方で、主治医の紹介によって大学の研究室を訪れ、竹の抗菌性を科学的に立証してもらうようになる。成分変動を解析し安定した品質を確立するには10年以上の歳月を要したものの、病原性大腸菌のO157による集団食中毒事件などを通じ、抗菌効果が広く認められるようにな



り、大手食品メーカーが採用、事業の発展につながっていった。

現在では、食品に混ぜることによって日持ちを長くさせる「タケックスキープ」や調理器具などの除菌を行う際に使用する「タケックスクリーン」などを販売している。

剛と柔を兼ね備えている点も抗菌性と並ぶ売り物。この特性を生かして、軽量で耐震性が高

い建材や構造体といった領域でも活躍している。

自動車の内装に着目

タケックス・ラボがこれから力を入れようとしているのが、こうした高付加価値分野。新しいビジネスモデルとして期待を寄せているのが、自動車の内装材分野だ。

地球温暖化対策の一環として自動車が二酸化炭素（CO₂）

の排出量を削減するには、燃費の改善が不可欠。それにはさらなる軽量化が必要となり、竹の特性を生かせば排出削減に貢献できるというわけだ。

製造技術はすでに確立した。具体的には、竹の繊維にヒートショック（温度急変による衝撃）を与えてコイル状にし、樹脂を混ぜ込んで商品化する。今秋には事業パートナーの工場が稼働する予定だ。「しっかりと戦略を練り、新しい市場を形成したい」。清岡社長は新事業の将来性を確信している。

大阪府吹田市に本社を構える同社は、2008年に三菱地所が運営する「創生ビレッジ」に入会。東京・丸の内に支社を構えた。信用力の向上に加え、首都圏での営業活動が容易な環境が整ったため、顧客との面談の数が飛躍的に拡大。以前には考えられなかった人脈も形成されつつある。

荒廃した竹林の放置は、山崩れの原因となるなど環境問題の悪化にもつながりかねない。一方、竹は循環性が高い森林資源でもある。環境調和社会を構築する上で、大きな潜在能力を秘める。丸の内という地の利を生かして新たな出会いが生まれ、斬新な商品の開発につながっていくことに、期待が集まる。

（伊藤俊祐）